

猫町

散文詩風な小説

萩原朔太郎

青空文庫

蠅はえを叩たたきつぶしたところで、蠅の「物そのもの」
は死にはしない。単に蠅の現象をつぶしたばかり
だ。——

シヨウペンハウエル。

1

旅への誘い^{いざな}が、次第に私の空想^{ロマン}から消えて行つた。昔はただその表象、汽車や、汽船や、見知らぬ他国の町々やを、イメージするだけでも心が躍^{おど}つた。しかるに過去の経験は、旅が単なる「同一空間における同一事物の移動」にすぎないことを教えてくれた。何処^{どこ}へ行つて見ても、同じような人間ばかり住んでおり、同じような村や町やで、同じような単調な生活を繰り返している。田舎^{いなか}のどこの小さな町でも、商人は店先で算盤^{そろばん}を弾^{はじ}きながら、

終日白っぽい往来を見て暮しているし、官吏は役所の中で煙草タバコを吸い、昼飯の菜のことなど考えながら、来る日も来る日も同じように、味気ない単調な日を暮しながら、次第に年老いて行く人生を眺ながめている。旅への誘いは、私の疲労した心の影に、とある空地きちに生はえた青桐あおぎりみたいな、無限の退屈した風景を映像させ、どこでも同一性の方則が反覆している、人間生活への味気ない嫌けんえ厭んを感じさせるばかりになった。私はもはや、どんな旅にも興味とロマンスをなくしてしまった。

久しい以前から、私は私自身の独特な方法による、不思議な旅行ばかりを続けていた。その私の旅行というのは、人が時空と因果の外に飛翔ひしょうし得る唯一の瞬間、即ちあの夢と現実との境界線すなわ

を巧みに利用し、主観の構成する自由な世界に遊ぶのである。と言つてしまえば、もはやこの上、私の秘密について多く語る必要はないであろう。ただ私の場合は、用具や設備に面倒な手数がかかり、かつ日本で入手の困難な阿片あへんの代りに、簡単な注射や服用ですむモルヒネ、コカインの類を多く用いたということだけを附記しておこう。そうした麻醉によるエクスタシイの夢の中で、私の旅行した国々のことについては、此所ここに詳しく述べる余裕がない。だがたいていの場合、私は蛙かえるどもの群がつてる沼沢地方や、極地に近く、ペンギン鳥のいる沿海地方などを徘徊ほうかいした。それらの夢の景色の中では、すべての色彩が鮮あざやかな原色をして、海も、空も、硝子ガラスのように透明な真青まっさおだった。醒さめての後にも、

私はそのヴィジョンを記憶しており、しばしば現実の世界の中で、異様の錯覚を起したりした。

薬物によるこうした旅行は、だが私の健康をひどく害した。私は日々に憔悴^{しやうすい}し、血色が悪くなり、皮膚が老衰に^{よじ}澱んでしまった。私は自分の養生^{ようじよう}生に注意し始めた。そして運動のための散歩の途上で、或る^あ日偶然、私の風変りな旅行癖を満足させ得る、一つの新しい方法を発見した。私は医師の指定してくれた注意によつて、毎日家から四、五十町（三十分から一時間位）の附近を散歩していた。その日もやはり何時^{いつ}も通りに、ふだんの散歩区域を歩いていた。私の通る道筋は、いつも同じように決まっていた。だがその日に限つて、ふと知らない横丁を通り抜けた。そしてす

つかり道をまちがえ、方角を解わからなくしてしまった。元来私は、磁石の方角を直覚する感官機能に、何かの著るしい欠陥をもった人間である。そのため道のおぼえが悪く、少し慣れない土地へ行くと、すぐ迷兎まいごになってしまった。その上私には、道を歩きながら瞑想めいそうに耽ふける癖があつた。途中で知人に挨あいさつ拶さつされても、少しも知らずにいる私は、時々自分の家のすぐ近所で迷兎になり、人に道をきいて笑われたりする。かつて私は、長く住んでいた家の廻まわりを、堀へいに添そうて何十回もぐるぐると廻り歩いたことがあつた。方角觀念の錯誤から、すぐ目の前にある門の入口が、どうしても見つからなかつたのである。家人は私が、まさしく狐きつねに化かされたのだと言つた。狐に化かされるといふ状態は、つまり心理学者

のいう三半規管の疾病であるのだろう。なぜなら学者の説によれば、方角を知覚する特殊の機能は、耳の中にある三半規管の作用だと言ふことだから。

余事はとにかく、私は道に迷つて困惑しながら、あてずいりよう 当推量で見当をつけ、家の方へ帰ろうとして道を急いだ。そして樹木の多い郊外の屋敷町を、幾度かぐるぐる廻つたあとで、ふと或る賑にぎやかな往来へ出た。それは全く、私の知らない何所どこかの美しい町であつた。街路は清潔そうじに掃除されて、鋪石ほせきがしつとりと露ぬに濡れていた。どの商店も小綺麗こぎれいにさっぱりして、磨みがいた硝子の飾かざり窓まどには、様々の珍しい商品が並んでいた。珈琲店コーヒーの軒には花樹が茂り、町に日蔭のある情趣を添えていた。四つ辻の赤いポストも

美しく、煙草屋の店にいる娘さえも、杏あんずのように明るくて可憐かれんであつた。かつて私は、こんな情趣の深い町を見たことがなかつた。一体こんな町が、東京の何所にあつたのだろう。私は地理を忘れてしまった。しかし時間の計算から、それが私の家の近所であること、徒歩で半時間位しか離れていないいつもの私の散歩区域、もしくはそのすぐ近い範囲にあることだけは、確実に疑いなく解つていた。しかもそんな近いところに、今まで少しも人に知れずに、どうしてこんな町があつたのだろうか？

私は夢を見ているような気がした。それが現実の町ではなくつて、幻燈の幕に映つた、影絵の町のように思われた。だがその瞬間に、私の記憶と常識が回復した。気が付いて見れば、それは私

のよく知っている、近所の詰らない、ありふれた郊外の町なのである。いつものように、四ツ辻にポストが立って、煙草屋には胃病の娘が坐^{すわ}っている。そして店々の飾窓には、いつもの流行おくれの商品が、埃^{ほこり}っぽく欠伸^{あくび}をして並んでいるし、珈琲店の軒には、田舎らしく造花のアーチが飾られている。何もかも、すべて私が知っている通りの、いつもの退屈な町にすぎない。一瞬間の中^{うち}に、すっかり印象が変ってしまった。そしてこの魔法のような不思議の変化は、単に私が道に迷って、方位を錯覚したことにだけ原因している。いつも町の南はずれにあるポストが、反対の入口である北に見えた。いつもは左側にある街路の町家が、逆に右側の方へ移ってしまった。そしてただこの変化が、すべての町を珍しく

新しい物に見せたのだった。

その時私は、未知の錯覚した町の中で、或る商店の看板を眺めていた。その全く同じ看板の絵を、かつて何所かで見たことがあると思った。そして記憶が回復された一瞬時に、すべての方角が逆転した。すぐ今まで、左側にあった往来が右側になり、北に向って歩いた自分が、南に向って歩いていることを発見した。その瞬間、磁石の針がぐるりと廻って、東西南北の空間地位が、すっかり逆に変ってしまった。同時に、すべての宇宙が変化し、現象する町の情趣が、全く別の物になってしまった。つまり前に見た不思議の町は、磁石を反対に裏返した、宇宙の逆空間に実在したのであった。

この偶然の発見から、私は故意に方位を錯覚させて、しばしばこのミステリイの空間を旅行し廻った。特にまたこの旅行は、前に述べたような欠陥によつて、私の目的に都合がよかつた。だが普通の健全な方角知覚を持つてゐる人でも、時にはやはり私と同じく、こうした特殊の空間を、経験によつて見たであらう。たとえば諸君は、夜おそく家に帰る汽車に乗つてゐる。始め停車場を出発した時、汽車はレールを真直に、東から西へ向つて走つてゐる。だがしばらくする中に、諸君はうたた寝の夢から醒める。そして汽車の進行する方角が、いつのまにか反対になり、西から東へと、逆に走つてゐることに気が付いてくる。諸君の理性は、決してそんなはずがないと思う。しかも知覚上の事実として、汽車はたしか

に反対に、諸君の目的地から遠ざかつて行く。そうした時、試みに窓から外を眺めて見給え。みたまいつも見慣れた途中の駅や風景やが、すっかり珍しく変ってしまったて、記憶の一片さえも浮ばないほど、全く別のちがった世界に見えるだろう。だが最後に到着し、いつものプラットホームに降りた時、始めて諸君は夢から醒め、現実の正しい方位を認識する。そして一いったん旦それが解れば、始めに見た異常の景色や事物やは、何でもない平常通りの、見慣れた詰らない物に変わってしまう。つまり一つの同じ景色を、始めに諸君は裏側から見、後には平常の習慣通り、再度正面から見たのである。このように一つの物が、視線の方角を換えることで、二つの別々の面を持つてること。同じ一つの現象が、その隠された「秘密の

裏側」を持つてるといふことほど、メタフィジックの神秘を包んだ問題はない。私は昔子供の時、壁にかけた額の絵を見て、いつも熱心に考え続けた。いったいこの額の景色の裏側には、どんな世界が秘密に隠されているのだろうか。私は幾度か額をはずし、油絵の裏側を覗のぞいたりした。そしてこの子供の疑問は、大人になった今日でも、長く私の解きがたい謎なぞになつてゐる。

次に語る一つの話も、こうした私の謎に対して、或る解答を暗示する鍵かぎになつてゐる。読者にしてもし、私の不思議な物語からして、事物と現象の背後に隠れてゐるところの、或る第四次元の世界——景色の裏側の实在性——を仮想し得るとせば、この物語の一切は真レアル実である。だが諸君にして、もしそれを仮想し得ない

とするならば、私の現実に経験した次の事実も、所詮しよせんはモルヒネ中毒に中枢を冒された一詩人の、取りとめもないデカダンスの幻覚にしか過ぎないだろう。とにかく私は、勇気を奮って書いて見よう。ただ小説家でない私は、脚色や趣向によつて、読者を興すべがらせる術を知らない。私の為なし得ることは、ただ自分の経験した事実だけを、報告の記事に書くだけである。

2

その頃私は、北越地方のKという温泉に滞留していた。九月も末に近く、彼岸を過ぎた山の中では、もうすっかり秋の季節にな

つていた。都会から来た避暑客は、既に皆帰つてしまつて、後あとには少しばかりの湯治客とうじきやくが、静かに病を養つていたのであつた。秋の日影は次第に深く、旅館の侘わびしい中庭には、木々の落葉が散らばつていた。私はフランネルの着物をきて、ひとりで裏山などを散歩しながら、所在のない日々の日課をすごしていた。

私のいる温泉地から、少しばかり離れた所に、三つの小さな町があつた、いずれも町というよりは、村というほどの小さな部落であつたけれども、その中の一つは相当に小ぢんまりした田舎町で、一通りの日常品も売っているし、都会風の飲食店なども少しはあつた。温泉地からそれらの町へは、いずれも直通の道路があつて、毎日定期の乗合馬車のりあいばしやが往復していた。特にその繁華なU

町へは、小さな軽便けいべん鉄道が布設されていた。私はしばしばその鉄道で、町へ出かけて行って買物をしたり、時にはまた、女のいる店で酒を飲んだりした。だが私の実の楽しみは、軽便鉄道に乗ることの途中にあった。その玩具おもちゃのような可愛い汽車は、落葉樹の林や、谷間の見える山峽やまかいやを、うねうねと曲りながら走って行った。

或る日私は、軽便鉄道を途中で下車し、徒歩でU町の方へ歩いて行った。それは見晴しの好い峠よの山道を、ひとりでゆっくり歩きたかったからであつた。道は軌道レールに沿いながら、林の中の不規則な小径を通つた。所々に秋草の花が咲き、赫土あかつちの肌はだが光り、伐きられた樹木が横たわっていた。私は空に浮んだ雲を見ながら、

この地方の山中に伝説している、古い口碑こうひのことを考えていた。概して文化の程度が低く、原始民族のタブーと迷信に包まれていゝるこの地方には、實際色々な伝説や口碑があり、今でもなお多数の人々は、真面目まじめに信じているのである、現に私の宿の女中や、近所の村から湯治に来てゐる人たちは、一種の恐怖と嫌悪けんおの感情とで、私に様々のことを話してくれた。彼らの語るところによれば、或る部落の住民は犬神に憑つかれており、或る部落の住民は猫神に憑つかれています。犬神に憑つかれたものは肉ばかりを食ひ、猫神に憑つかれたものは魚ばかり食つて生活している。

そうした特異な部落を称して、この辺の人々は「憑つき村」と呼び、一切の交際を避けて忌いみ嫌きらった。「憑つき村」の人々は、年に

一度、月のない闇夜やみよを選んで祭礼をする。その祭の様子は、彼ら以外の普通の人には全く見えない。稀まれに見て来た人があっても、なぜか口をつぐんで話をしない。彼らは特殊の魔力を有し、所因の解らぬ莫ぼくだい大の財産を隠している。等々。

こうした話を聞かせた後で、人々はまた追加して言った。現にこの種の部落の一つは、つい最近まで、この温泉場の附近にあつた。今ではさすがに解消して、住民は何所どこかへ散ってしまったけれども、おそらくやはり、何所かで秘密の集団生活を続けているにちがいない。その疑いない証拠として、現に彼らのオクラ（魔神の正体）を見たという人があると。こうした人々の談話の中には、農民一流の頑がんめい迷さが主張づけられていた。否いやでも応でも、

彼らは自己の迷信的恐怖と実在性とを、私に強制しようとするのであつた。だが私は、別のちがつた興味でもつて、人々の話を面白く傾聴していた。日本の諸国にあるこの種の部落的タブーは、おそらく風俗習慣を異にした外国の移住民や帰化人やを、先祖の氏神にもつ者の子孫であろう。あるいは多分、もつと確実な推測として、^{キリシタン}切支丹宗徒の隠れた集合的部落であつたのだろう。しかし宇宙の間には、人間の知らない数々の秘密がある。ホレーシオが言うように、理智は何事をも知りはしない。理智はすべてを常識化し、神話に通俗の解説をする。しかも宇宙の隠れた意味は、常に通俗以上である。だからすべての哲学者は、彼らの窮理の最後に来て、いつも詩人の前に兜かぶとを脱いでる。詩人の直覚する超常

識の宇宙だけが、真のメタフィジックの實在なのだ。

こうした思惟しゆいに耽ふけりながら、私はひとり秋の山道を歩いていた。その細い山道は、径路に沿うて林の奥へ消えて行つた。目的地への道標として、私が唯一のたよりにしていた汽車の軌道レールは、もはや何所にも見えなくなつた。私は道をなくしたのだ。

「迷い子！」

瞑想から醒めた時に、私の心に浮んだのは、この心細い言葉であつた。私は急に不安になり、道を探そうとしてあわて出した。私は後へ引返して、逆に最初の道へ戻もどろうとした。そして一層地理を失い、多岐に別れた迷路の中へ、ぬきさしならず入つてしまつた。山は次第に深くなり、小径は荊棘いばらの中に消えてしまつた。

空^{むな}しい時間が経過して行き、一人の樵夫^{きこり}にも逢^あわなかつた。私はだんだん不安になり、犬のように焦燥しながら、道を嗅^かぎ出そうとして歩き廻つた。そして最後に、漸^{ようや}く人馬の足跡のはつきりついた、一つの細い山道を発見した。私はその足跡に注意しながら、次第^{ふもと}に麓の方へ下つて行つた。どっちの麓へ降りようとも、人家のある所へ着きさえすれば、とにかく安心ができるのである。

幾時間かの後、私は麓へ到着した。そして全く、思いがけない意外の人間世界を発見した。そこには貧しい農家の代りに、繁華な美しい町があつた。かつて私の或る知人が、シベリヤ鉄道の旅行について話したことは、あの満目^{こうり}荒^{りよう}寥^{よう}たる無人の曠野^{こうや}を、汽車で幾日も幾日も走つた後、漸く停車した沿線の一小駅が、世

にも賑にぎわしく繁華な都会に見えるということだった。私の場合の印象もまた、おそらくはそれに類した驚きだった。麓の低い平地へかけて、無数の建築の家屋が並び、塔や高樓が日に輝やいてた。こんな辺鄙へんぴな山の中に、こんな立派な大都会が存在しようとは、容易に信じられないほどであった。

私は幻燈を見るような思いをしながら、次第に町の方へ近付いて行つた。そしてとうとう、自分でその幻燈の中へ這入はいつて行つた。私は町の或る狭い横よこ丁ちようから、胎内めぐりのような路みちを通じて、繁華な大おお通とほりの中央へ出た。そこで目に映じた市街の印象は、非常に特殊な珍しいものであつた。すべての軒並のきなみの商店や建築物は、美術的に変つた風情ふぜいで意匠され、かつ町全体として

の集合美を構成していた。しかもそれは意識的にしたのでなく、偶然の結果からして、年代の錆さびがついて出来てるのだった。それは古雅で奥床おくゆかしく、町の古い過去の歴史と、住民の長い記憶を物語っていた。町幅は概して狭く、大通でさえも、漸く二、三間げん位であつた。その他の小路は、軒と軒との間にはさまれていて、狭く入混いりこんだ路地ろじになつた。それは迷路のように曲折しながら、石畳のある坂を下に降りたり、二階の張り出した出窓の影で、暗く隧トンネル道道になつた路をくぐつたりした。南国の町のように、所々に茂つた花樹はが生え、その附近には井戸があつた。至るところに日影が深く、町全体が青樹の蔭のようにしっとりしていた。娼しょう家からしい家が並んで、中庭のある奥の方から、閑雅な音楽の音

が聴^{きこ}えて来た。

大通の街路の方には、硝子窓のある洋風の家が多かった。理髪店の軒先には、紅白の丸い棒が突き出してあり、ペンキの看板に Barbershop と書いてあった。旅館もあるし、洗濯^{せんたく}屋もあった。町の四辻に写真屋があり、その氣象台のような硝子の家屋に、秋の日の青空が侘^{わび}しげに映っていた。時計屋の店先には、眼鏡をかけた主人が坐つて、黙つて熱心に仕事をしていた。

街^{まち}は人出で賑やかに雑^{ざつ}鬧^{とう}していた。そのくせ少しも物音がなく、閑雅にひっそりと静まりかえつて、深い眠りのような影を曳^ひいてた。それは歩行する人以外に、物音のする車馬の類が、一つも通行しないためであった。だがそればかりでなく、群集そのも

のがまた静かであつた。男も女も、皆上品で慎み深く、典雅でおっとりとした様子をしていた。特に女は美しく、淑やかな上にコケチツシユであつた。店で買物をしている人たちも、往来で立話をしている人たちも、皆が行儀よく、かいちよう諧調のとれた低い静かな声で話をしていた。それらの話や会話は、耳の聴覚で聞くよりは、何かの或る柔らかい触覚で、てざわ手触りに意味を探るといふような趣きだつた。とりわけ女の人の声には、どこか皮膚の表面を撫なでるような、甘美でうっとりとした魅力があつた。すべての物象と人物とが、影のように往来していた。

私が始めて気付いたことは、こうした町全体のアトモスフィアが、非常に繊細な注意によつて、人為的に構成されていることだ

った。単に建物ばかりでなく、町の気分を構成するところの全神経が、或る重要な美学的意匠にのみ集中されていた。空気のいささかな動揺にも、对比、均齊きんせい、調和、平衡等の美的方則を破らないよう、注意が隅々すみずみまで行き渡っていた。しかもその美的方則の構成には、非常に複雑な微分数的計算を要するので、あらゆる町の神経が、異常に緊張して戦おのっていた。例えばちよつとした調子はずれの高い言葉も、調和を破るために禁じられる。道を歩く時にも、手を一つ動かす時にも、物を飲食する時にも、考えごとをする時にも、着物の柄を選ぶ時にも、常に町の空気と調和し、周囲との対比や均齊を失わないよう、デリケートな注意をせねばならない。町全体が一つの薄い玻璃はりで構成されてる、危険な毀こわれ

やすい建物みたいであつた、ちよつとしたバランスを失つても、家全体が崩壊して、硝子が粉々に砕けてしまう。その安定を保つためには、微妙な数理によつて組み建てられた、支柱の一つ一つが必要であり、その対比と均斉とで、辛うじて支えているのであつた。しかも恐ろしいことには、それがこの町の構造されてる、真の現実的な事実であつた。一つの不注意な失策も、彼らの崩壊と死滅を意味する。町全体の神経は、そのことの危懼と恐怖で張りきつていた。美学的に見えた町の意匠は、単なる趣味のための意匠でなく、もつと恐ろしい切実の問題を隠していたのだ。

始めてこのことに気が付いてから、私は急に不安になり、周囲の充電した空気の中で、神経の張りきつてる苦痛を感じた。町の

特殊な美しさも、静かな夢のような閑寂さも、かえってひっそりと気味が悪く、何かの恐ろしい秘密の中で、暗号を交かわしているように感じられた。何事かわからない、或る漠ばくぜん然とした一つの予感が、青ざめた恐怖の色で、忙がしく私の心の中を馳かけ廻った。すべての感覚が解放され、物の微細な色、匂におい、音、味、意味までが、すっかり確実に知覚された。あたりの空気には、死屍ししのような臭気が充満して、気圧が刻々に嵩たかまつて行つた。此所ここに現象しているものは、確かに何かの凶兆である。確かに今、何事かの非常が起る！ 起るにちがいない！

町には何の変化もなかった。往来は相変わらず雑鬧して、静かに音もなく、典雅な人々が歩いていった。どこかで遠く、胡弓こきゆうをこ

するような低い音が、悲しく連続して聴えていた。それは大地震の来る一瞬前に、平常と少しも変らない町の様子を、どこかで一人が、不思議に怪しみながら見ているような、おそろしい不安を内容した予感であつた。今、ちよつとしたはずみで一人が倒れる。そして構成された調和が破れ、町全体が混乱の中に陥入おちいつてしまふ。

私は悪夢の中で夢を意識し、目ざめようとして努力しながら、必死に蹴もがいている人のように、おそろしい予感の中で焦燥した。空は透明に青く澄んで、充電した空気の密度は、いよいよ刻々に嵩かさまつて来た。建物は不安に歪ゆがんで、病気のように瘠やせ細つて来た。所々に塔のような物が見え出して来た。屋根も異様に細長く、

瘠せた鶏の脚あしみたい、へんに骨ばって畸形きけいに見えた。

「今だ！」

と恐怖に胸を動悸どうきしながら、思わず私が叫んだ時、或る小さな黒い、鼠ねずみのような動物が、街の真中を走って行った。私の眼には、それが実によくはつきりと映像された。何かしら、そこには或る異常な、唐突な、全体の調和を破るような印象が感じられた。

瞬間。万象が急に静止し、底の知れない沈黙が横たわった。何事かわからなかった。だが次の瞬間には、何なんびと人にも想像されな、い、世にも奇怪な、恐ろしい異変事が現象した。見れば町の街路に充満して、猫の大集団がうようよと歩いているのだ。猫、猫、猫、猫、猫、猫、猫、猫。どこを見ても猫ばかりだ。そして家々の窓

口からは、髭ひげの生はえた猫の顔が、額縁の中の絵のようにして、大きく浮き出して現れていた。

戦慄せんりつから、私は殆ほとんど息が止まり、正に昏倒こんとうするところであつた。これは人間の住む世界でなくて、猫ばかり住んでる町ではないのか。一体どうしたと言うのだろうか。こんな現象が信じられるものか。たしかに今、私の頭脳はどうかしている。自分は幻影を見ているのだ。さもなければ狂気したのだ。私自身の宇宙が、意識のバランスを失つて崩壊したのだ。

私は自分が怖こわくなった。或る恐ろしい最後の破滅が、すぐ近い所まで、自分に迫つて来るのを強く感じた。戦慄が闇を走つた。だが次の瞬間、私は意識を回復した。静かに心を落おちつけ付ながら、

私は今一度目をひらいて、事実の真相を眺め返した。その時もはや、あの不可解な猫の姿は、私の視覚から消えてしまった。町には何の異常もなく、窓はがらんとして口を開けていた^あ。往来には何事もなく、退屈の道路が白つちやけてた。猫のようなものの姿は、どこにも影さえ見えなかつた。そしてすっかり情態が一変していた。町には平凡な商家が並び、どこの田舎にも見かけるような、疲れた埃っぽい人たちが、白昼の乾いた街^{かわ}を歩いていた。あの蠱惑^{こわくてき}的な不思議な町はどこかまるで消えてしまつて、骨牌^{カルタ}の裏を返したように、すっかり別の世界が現れていた。此所に現実している物は、普通の平凡な田舎町。しかも私のよく知っている、いつものU町の姿ではないか。そこにはいつもの理髪店が、客の

来ない椅子いすを並べて、白昼の往来を眺めているし、さびれた町の左側には、売れない時計屋が欠伸あくびをして、いつものように戸を閉めている。すべては私が知ってる通りの、いつもの通りに変化のない、田舎の単調な町である。

意識が此所まではつきりした時、私は一切のことを了解した。愚かにも私は、また例の知覚の疾病「三半規管の喪失」にかかったのである。山で道を迷った時から、私はもはや方位の観念を失喪していた。私は反対の方へ降りたつもりで、逆にまたU町へ戻って来たのだ。しかもいつも下車する停車場とは、全くちがった方角から、町の中心へ迷い込んだ。そこで私はすべての印象を反対に、磁石のあべこべの地位で眺め、上下四方前後左右の逆転し

た、第四次元の別の宇宙（景色の裏側）を見たのであった。つまり通俗の常識で解説すれば、私はいわゆる「狐に化かされた」のであった。

3

私の物語は此所で終る。だが私の不思議な疑問は、此所から新しく始まって来る。支那の哲人莊子そうしは、かつて夢に胡蝶こちようとなり、醒めて自ら怪しみ言った。夢の胡蝶が自分であるか、今の自分が自分であるかと。この一つの古い謎は、千古にわたってだれも解けない。錯覚された宇宙は、狐に化かされた人が見るのか。理智

の常識する目が見るのか。そもそも形而上けいじじょうの実在世界は、景色の裏側にあるのか表にあるのか。だれもまた、おそらくこの謎を解答できない。だがしかし、今もなお私の記憶に残っているものは、あの不可思議な人外の町。窓にも、軒にも、往来にも、猫の姿がありありと映像していた、あの奇怪な猫町の光景である。私の生きた知覚は、既に十数年を経た今日でさえも、なおその恐ろしい印象を再現して、まざまざとすぐ眼の前に、はつきり見ることができるのである。

人は私の物語を冷笑して、詩人の病的な錯覚であり、愚にもつかない妄想もうそうの幻影だと言う。だが私は、たしかに猫ばかりの住んでる町、猫が人間の姿をして、街路に群集している町を見たの

である。理窟りくつや議論はどうにもあれ、宇宙の或る何所かで、私がそれを「見た」ということほど、私にとつて絶対不惑の事実はない。あらゆる多くの人々の、あらゆる嘲ちようしやう笑しょうの前に立つて、私は今もなお固く心に信じている。あの裏日本の伝説が口碑こうひしている特殊な部落。猫の精霊ばかりの住んでる町が、確かに宇宙の或る何所かに、必らず実在しているにちがいないということ。

青空文庫情報

底本：「猫町 他十七篇」岩波文庫、岩波書店

1995（平成7）年5月16日第1刷発行

1997（平成9）年12月5日第4刷発行

底本の親本：「萩原朔太郎全集 第五卷」筑摩書房

1976（昭和51）年1月25日

初出：「セルパン」

1935（昭和10）年8月号

※副題は底本では、「散文詩風な小説《ロマン》」となっていて
す。

入力：ryoko masuda

校正：浜野智

1999年1月12日公開

2018年10月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

猫町

散文詩風な小説

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 萩原朔太郎
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>